

令和 7 年度 千葉県における「とらふぐ千葉県海域」に係る資源管理協定の取組の効果の検証結果（中間）

（１）千葉県におけるトラフグの漁業実態

千葉県においてトラフグは銚子・九十九里海域～東京湾内湾海域の広い海域において重要な資源となっており、はえ縄漁業、定置網漁業、小型機船底びき網漁業、まき網漁業などで漁獲されている。近年、県内各海域で漁獲が増加しており、特に夷隅地域のはえ縄による漁獲が急増している。

（２）資源管理の目標及び目標達成のための具体的な取組

目標（千葉県資源管理方針に定める資源管理の方向性）

千葉県沿岸水産資源の資源評価において判断される中位以上の資源水準（漁獲量で 1 年当たり 3.0 トンを上回る資源水準）を維持する。

該当する資源管理協定

「とらふぐ千葉県海域」に係る資源管理協定（以下、協定という。）は下表のとおりで、1 漁協所属の約 10 名がトラフグを対象とした協定に参加しており、このうち本検証の対象となるのは、1 協定となっている。

協定	備考
新富津	

本検証の対象協定

自主的取組

東京湾内湾の小型機船底びき網漁業では、関係漁業者により、内湾底びき網連絡協議会が組織されており、資源管理の取組は当該協議会で協議決定の上、実践している。

漁業の種類	資源管理の取組	取組の内容	備考
小型機船底びき網漁業	休漁日の設定	定期休漁（火・土曜日）	
	操業時間の制限、 漁具の制限等	漁具の制限：桁幅の制限 操業時間：内湾底びき網連絡協議会で資源状況等に応じて協議決定	

協定に記載されている取組

上記取組の他、小型機船底びき網漁業では、資源状況等に合わせて内湾底びき網連絡協議会で協議決定した、年末年始お盆期間の休漁、禁漁期間の設定といった様々な取組を実施し、状況に応じた検討を行っている。

(3) 資源管理の取組状況

本県主要漁協におけるトラフグの漁獲量は 2001～2016 年漁期は約 2～7 トンで推移していたが、2017 年漁期に 10 トンに急増し、その後も増加傾向を示し、2024 年漁期は約 49 トンであった（漁期は 4 月から翌年 3 月）（図 1）。また、本検証の対象となる協定の参加者が漁場とする東京湾内湾における漁獲量についても、近年は良好な漁獲状況となっている（図 2）。県の令和 7 年(2025)度資源評価では、現在の資源動向は増加、資源水準は高位となっている。一方で、協定参加者による検証（以下、「自己点検」という。）では、漁獲努力量は維持していると判断されたものの、漁獲量及び CPUE（単位努力量あたり漁獲量）は減少と判断されている。また、魚価（単価）は上昇していると判断している。

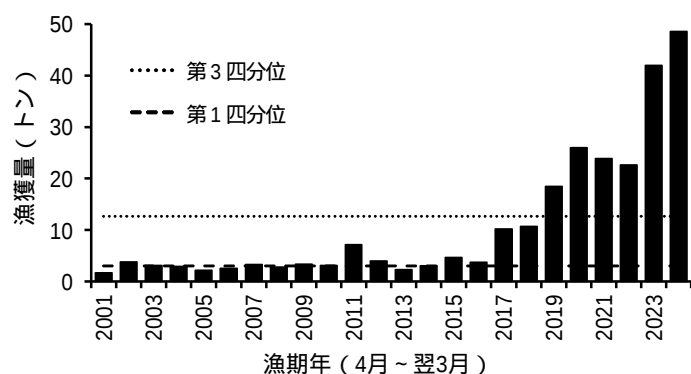


図 1 千葉県主要漁協におけるトラフグ漁獲量の経年変化
(千葉県調べ)

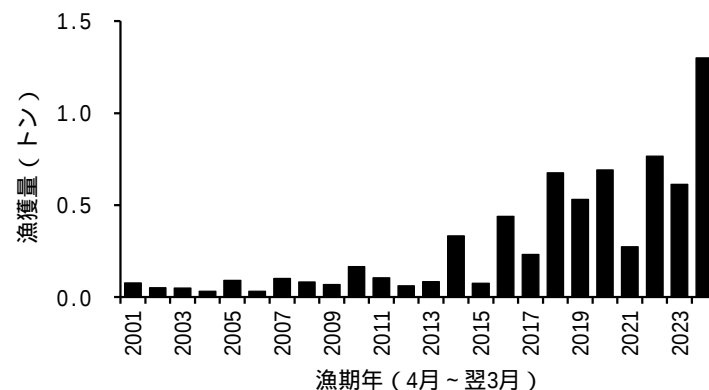


図 2 東京湾内湾主要漁協におけるトラフグの経年変化
(千葉県調べ)

(4) 資源管理の効果を高めるための協定の改善・高度化の検討

トラフグについては休漁日の設定や操業時間の制限といった取組が実施され、自己点検では漁獲努力量が維持されていると判断された中、2024 年は資源が高水準となっており、漁業者がこれまで実施してきた資源管理の取組が資源維持の一助になっていると考えられる。一方で、自己点検では漁獲量及び CPUE が減少しているという実感から「取組の効果は感じない」とされており、効果を感じられない要因は海洋環境による影響と判断されている。実際に、協定参加者の主漁場である東京湾内湾は貧酸素水塊等の海洋環境が漁業に大きく影響する海域であることも踏まえると、資源状況が良好であったとしても、海洋環境が影響して、協定参加者が営む小型底びき網漁業では獲れにくいなどの影響が及んでいる可能性が否定できない。

このため、資源の有効利用を図るためには、現在の取組を継続していくとともに、今後の海洋環境の変化や資源状況を注視し、状況に応じた対応を検討していくことが重要と考えられる。